

ヨエル書

第一章一ペトエルの子ヨエルに臨めるエホバの言二老たる人よ
 汝ら是を聴けすべて此地に住む者汝ら耳を傾けよ汝らの世あ
 るは汝らの先祖の世にも是のごとき事ありしや三汝ら之を子に
 語り子はまた之をその子に語りその子之を後の代に語りつたへ
 よ四啞くらふ蝗虫の遣せる者は群ある蝗虫のくらふ所となり
 その遣せる者はなめつくすおほねむしのくらふ所となりその遣
 せる者は喫ほろぼす蝗虫の食ふ所となれり五酔る者よ汝ら目を
 醒して泣けすべて酒をのみ者よ哭きさけべあたらしき酒なん
 ぢらの口に絶えたればなり六そはことなる民わが國に攻よすれ
 ばなりその勢ひ強くその數はかられずその齒は獅子の齒のご
 とくその牙は牝獅子の牙のごとし七彼等わが葡萄の樹を荒しわ
 が無花果の樹を折りその皮をはぎはだかにして之を棄つその
 枝白くなれり八汝ら哀哭かなしめ貞女その若かりしときの夫
 のゆゑに麻布を腰にまといて哀哭かなしむがごとくせよ九素祭
 灌祭ともにエホバの家に絶えエホバに事ふる祭司等哀傷をな
 す一〇田は荒地地は哀傷む穀物荒はて新しき酒つき油たえん
 とすればなり一一こむぎ大むぎの故をもて農夫羞ぢよ葡萄をつ
 くり哭けよ田の禾稼つせはてたればなり一二葡萄樹は枯れ
 無花果樹は萎れ石榴椰子林檎および野の諸の樹は凋みたり是
 をもて世の人の喜樂かれうせぬ三祭司よ汝ら麻布を腰にまと

ひてなきかなしめ祭壇に事ふる者よ汝らなきさけべ神に事ふ
 る者よなんぢら來り麻布をまとひて夜をすこせ其は素祭も
 灌祭も汝らの神の家に入ことあらざればなり一四汝ら斷食を定
 め集會を設け長老等を集め國の居民をことごとく汝らの神エ
 ホバの家に集めエホバにむかひて號呼れよ一五ああその日は禍
 なるかなエホバの日近く暴風のごとくに全能者より來らん一六
 我がまのあたりに食物絶えしにあらずや我らの神の家に
 歡喜と快樂絶しにあらずや一七種は土の下に朽ち倉は壞れ廩は
 圯るそは穀物ほろぼされたればなり一八いかに畜獸は哀み鳴く
 や牛の群は亂れ迷ふ草なければなり羊の群もまた死喪ん一九
 エホバよ我なんぢに向ひて呼はらん荒野の諸の草は火にて焼
 け野の諸の樹は火焰にてやけつくればなり二〇野の獸もまた汝
 にむかひて呼はらん其は水の流涸はて荒野の草火にてやけつ
 くればなり

第二章一汝らシオンにて喇叭を吹け我聖山にて音たかく之を
 吹鳴せ國の民みな慄ひわななかんそはエホバの日きたらんと
 すればなりすでに近づけり二この日は黒くをくらき日雲むらら
 るまぐらき日にしてしこの日の山々にたなびくが如し數おほ
 く勢さかななる民むれいたらんかかる者はいにしへよりあり
 しことなくのちの代々の年にもあることなるべし三火彼らの
 前を焚き火焰かれらの後にもゆその過さる前は地エデンのご
 とくその過しのちは荒はてたる野の如し此をのがれうるもの

一としてあることなし四 彼らの状は馬のかたちのごとく其馳ありくことは軍馬のごとし五 その山の嶺にとびをどる音は車の轟聲のごとしまた火の稗株をやくおとの如くしてその様強き民の行伍をたてて戦陣にのぞむに似たり六 そのむかふところ諸民戦慄きその面みな色を失ふ七 彼らは勇士の如くに趨あるき軍人のごとくに石垣に攀のぼる 彼ら各々おのが道を進みゆきてその列を亂さず八 彼ら互に推あはず各々その道にしたがひて進み行く 彼らは刃に觸るとも身を害はず九 彼らは邑をかけめぐり石垣の上に奔り家に攀登り盜賊のごとくに窓より入る一〇 そのむかふところ地ゆるぎ天震ひ日月も暗くなり星その光明を失ふ二 エホバその軍勢の前にて聲をあげたまふ 其軍旅はなはだ大なればなり 其言を爲とぐる者は強し エホバの日は大にして甚だ畏るべきが故に誰かこれに耐ることを得んや三 然どエホバ言たまふ 今にても汝ら斷食と哭泣と悲哀とをなし心をつくして我に歸れ四 汝ら衣を裂かずして心を裂き汝等の神エホバに歸るべし 彼は恩恵あり憐憫ありかつ怒ることゆるく愛憐大にして災害をなすを悔たまふなり五 誰か彼のあるひは立歸り悔て祝福をその後にとめのこし 汝らをして素祭と灌祭となんぢらの神エホバにささげしめたまはじと知んや六 汝らシオンにて喇叭を吹きならし 斷食を定め公會をよびつどへ七 民を集めその會を潔くし 老たる人をあつめ孩童と乳哺子を集め 新郎をその室より呼びだし 新婦をその密室より呼びだせ 二七 而

してエホバに事ふる祭司等は廊と祭壇の間にて泣て言へ エホバよ 汝の民を赦したまへ 汝の産業を恥辱しめらるるに任せ之を異邦人に治めさする勿れ 何ぞ異邦人をして彼らの神は何處にあると言しむべけんや八 然せばエホバ己の地にために嫉妬を起しその民を憐みたまはん九 エホバ應へてその民に言たまはん 視よ我穀物とあたらしき酒と油を汝におくる 汝ら之に飽ん 我なんぢらをして重ねて異邦人の中に恥辱を蒙らしめじ一〇 我北よりきたる軍を遠く汝らより離れしめつるほひなき荒地に逐やらん 其前軍を東の海にその後軍を西の海に入れん その臭味立ちその惡臭騰らん 是大なる事を爲たるに因る二 地よ 懼るる勿れ 喜ひ樂しめ エホバ大なる事を行ひたまふなり三 二野の獸よ 懼るる勿れ あれ野の牧草はもえいで 樹は果を結び 無花果樹葡萄樹はその力をめざすなり四 シオンの子等よ 汝らの神エホバによりて樂め喜へ エホバは秋の雨を適當なんぢらに賜ひまた前のごとく秋の雨と春の雨とを汝らの上に降せたまふ五 打場には穀物盈ち 甕にはあたらしき酒と油溢れん六 我が汝らに遣しし大軍すなはち群ある蝗なめつくす 蝗喫ほろぼす 蝗噬くらふ 蝗の觸あらせる年をわれ 汝らに暗はん七 汝らは食ひ食ひて飽きよのつねならずなんぢらを待ひたまひし 汝らの神エホバの名をほめ頌へん 我民はとこしへに辱しめらるることなかるべし 七 かくて汝らはイスラエルの中に我が居るを知り 汝らの神エホバは我のみにて外に無きことを知らん 我民は

永遠に辱かしませらるることなかるべし二八その後われ吾靈を一切の人に注がん 汝らの男子女子は預言せん 汝らの老たる人は夢を見 汝らの少き人は異象を見ん二九その日我またわが靈を僕婢に注がん三〇また天と地に徴證を顯さん 即ち血あり火あり煙の柱あるべし三一エホバの大なる畏るべき日の來らん前に日は暗く月は血に變らん三二凡てエホバの名を籲ぶ者は救はるべしそはエホバの宣ひし如くシオンの山とエルサレムとに救はれし者あるべければなり 其遣れる者の中にエホバの召し給へるものあらん

第三章一觀よ我ユダとエルサレムの俘囚人を歸さんその日その時二萬國の民を集め之を携へてヨシャパテの谷にくだりかしこにて我民我ゆづりの産なるイスラエルのために彼らをさばかん 彼らこれを國々に散してその地を分ち取りたればなり三彼らは籤をひきて我民を取り童子を娼妓に換へ童女を賣り酒に換て飲めり四ツ口、シドンよベリシテのすべての國よ 汝ら我と何のかかはりあらんや 汝ら我がなししことに返をなさんとするや 若し我に返報をなさんとならば我忽ち迅速に汝らがなししことをもてその首に歸らしめん五是は汝らは我の金銀を取り我のしたふべき寶を汝らの宮にたづさへゆき六またユダの人とエルサレムの人をギリシヤ人に賣りてその本國より遠く離らせたればなり七視よ我かられを起して汝らが賣りたる處より出し 汝らがなししことをもてその首にかへらしめん八我はなんぢらの

男子女子をユダの人の手に賣り 彼らは之を遠き民なるシバ人に賣らん 九エホバこれを言ふ九もろもろの國に宣つたへよ 戰爭の準備を爲し 勇士をばげまし 軍人をことごとくちかより來らしめよ一〇汝等の鋤を劍に打かへ 汝らの鎌を鎗に打かへよ 弱き者も我は強しと言へ二四周の國々の民よ 汝ら急ぎ上りて集れ 三エホバよ 汝の勇士をかしこに降したまへ 四國々の民よ 起て上り 五ヨシャパテの谷に至れ 彼處に我座をしめて 四周の國々の民をことごとく鞠かん 六鎌をいれよ 穀物は熟せり 來り踏めよ 酒榨は盈ち 糞は溢る 彼らの惡大なればなりと 七かまびすしきかな 無数の民審判の谷にありて かまびすし 八エホバの日審判の谷に近づくが故なり 九日月も暗くなり 星その光明を失ふ一〇エホバ、シオンよりよびとどろかし エルサレムより聲をはなち 天地を震ひうごかしたまふ 然れどエホバはその民の避所 一エホバの子孫の城となりたまはん 一七かくて 汝ら我はエホバ汝等の神にして我聖山シオンに住むことをしるべし 一八エルサレムは聖き所となり 他國の人は重ねてその中をかよふまじ 一九その日山にあたらしき酒滴り 岡に乳流れ 二〇ユダのもろもろの河に水流れ 二一エホバの家より 泉水流れいでて シツテムの谷に灌がん 二二エジプトは荒すたれ 二エドムは荒野とならん 是はかれらユダの子孫を虐げ 辜なき者の血をその國に流したればなり 二〇されどユダは永久にすまひ 三エルサレムは世々に保たん 四我さきにはかれらが流しし血の罪を報いざりしが 今はこれをむくいん 五エホバ、

ヨエル書

シオンに住すみたまはん